目次

國家の興隆と佛法の興隆……本多日生
日蓮主義より見たる無量義經……井村日咸
法華經要文講義……本多日生
罷唾錄……山根日東
記事報導……

第三十四年四月號

本多日生猊下施本用著書一覽

○法華經自我偈講義　拾部　特價　金貳拾錢
○法華經要文（改訂再版發行）　並製金壹圓（送料共）　上製金參拾五錢
○教育勅語と思想問題　拾部　特價　金壹圓（送料共）　金貳拾錢
○うゐの奥山今日こえて　拾部　特價　金壹圓廿錢（送料共）
○國と人と教　拾五部　特價　金拾五錢（送料共）
佐藤海軍中將著
○此の際に於る吾人の覺悟　拾貳部　特價　金壹圓（送料共）
以上各送料一部金貳錢

名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
電話東五（四八七）番
振替名古屋一〇八一九番

統一定價	
一部	金貳拾錢　送料五厘
半ケ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ケ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
一頁	金五圓

前金之事

顯本法華宗教義講習會開催廣告

一講題ト講師　本尊論　管長大僧正本多日生師　法華信仰ノ基調　宗務總監僧正井村日咸師
一會期　大正十四年五月二日ヨリ仝六日マデ五日間　毎夜開午後七時ヨリ仝十時マデ
一會場　大阪市東區西高津中寺町地藏坂北蓮成寺
一會員　聽講劵金壹圓會期中有効
一申込　大正十四年四月二十五日限リ
大阪市東區西高津中寺町蓮成寺內
申込所　顯本法華宗
主催　立正結社大阪支部

大正十四年二月十七日印刷納本
大正十四年三月一日發行（第三百六十號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
印刷人　鈴木日雄

名古屋市東區千種町字五反田五二番地
印刷所　三益社

東京府荏原郡品川町南品川西百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

名古屋市東區田代町城山七十七番地
編輯所　統一編輯局

不許複製

大僧正本多日生撰

法華經要文

布裝 一部 金五拾錢
紙裝 一部 金參拾五錢 送料金貳錢

改訂再版發行、全文四號活字、總振假名付。

大僧正本多日生師著

綜合的佛教觀

◆四六版 全一冊 金壹圓五拾錢 送料十五錢

發行所 名古屋市東區田代町城山 統一編輯局
振替名古屋一〇八一九番
電話東五四八七番

來ル四月十一日ヨリ十二日ニ至ル三日間修行

大法會

一、國禱會法要
一、祠堂施主祖先靈法要
一、財團翼賛員祖先靈法要
一、關東地方大震火災殃死之精靈追善法要

毎日 午前九時 午後一時 法要
午前七時 午後三時 說教（管長本多大僧正）
十一、十二日 午後七時 講演（外全國布教師十名）

右相營候條繰合御參詣被下度此段御案内申上候也

追而準備の都合も有之候に付御參詣の人員數四月五日迄に御通知被下度候

京都寺町二條下ル
總本山妙滿寺法要部
電話（本局）八十六番
振替口座大阪四六二五九番

國家の興隆と佛法の興隆（下）

本多日生

一 統

この講題に就ては前二回に亙つてお話を申上げたので、第一回には國家と教法との關係に就て、國は正しき教を奉ずる事に依つて健全なる發達を遂ぐるものであり、教は理想の國家の擁護を得て隆盛に赴くものであつて、國と法との關係は互に相倚り相助けて行くべきものである。若しも國家が教を輕んじ、教が國を忘れるといふことがあつたならば、それは孰れも缺けたものであつて完きものではないといふ意味合をお話して、さうして日本の國家と我が佛教とは必ず協力一致して進んで行くものであるといふことを申上げた。第二回には、右樣なる譯であるにも拘らず我國に於ては佛教を輕んずる風が今尙ほ改まらない、さうして何故に佛法を輕んずるやうな傾向を持つかと云へば、二つの大きな誤解から來て居る、一つは外來の文化を迎ふるに於て、西洋の歴史に有りし事柄に惑りて、即ち西洋の歴史は宗教が國家を倒したのである、基督教は羅馬の國家を倒して千有餘年の長きに亙つて、總て國家の爲すべき權力を宗教が握つてしまつた、羅馬法王が萬事を支配する、啻に人々の心を指導啓發するばかりでなくして、形に屬する國家の權力を行うたものであるか

ら、それが爲に後に至つて近世の國家が興する時には宗教を敵として鬪つて奪つたのである。今の國家は羅馬法王の持つて居つた權力を段々に押付けて、さうして國家の權力を發達せしめたのであるから、宗教が或る意味に於て勢力を得るといふことは、敵が頭を持上げるといふやうな意味になる。故に有ゆる方面からして宗教には警戒の眼を捨てなかつた。それが第一は政治の上に起る事であるが、次には教育の上に、又道德觀の上に、社會の有ゆる方面に對して宗教には警戒の眼を捨てなかつたものである。その事を早くから西洋の事情に通じた日本の政治家、學者が考へて、日本に於ても宗教には警戒をしないといふとどういふ間違ひが起るかも知れないといふので、政治の方からは信教自由とは言ふけれども、所謂敬遠主義を採つて、重んずるが如く輕んずるが如く、生殺しといふ方法を以て政略として選んで來たのである。生殺しと云ふのは決して好意を持つて居るものではない、人の氣付かないやうな方法で段段に窘めて行くのであるから、丁度性の惡い姑婆が嫁を窘めるやうな調子で、人が來たら言ひ譯をして「私は決して嫁を窘めて居るのではありませぬ」と言ふけれども、腹の底が窘め上げやうといふのであるから、人が居なくなると嫁の尻を抓る。丁度その通りに、日本の宗教は有ゆる點から窘め上げられて、段々に萎縮して來たのである。實に政治界ばかりでなくこれを教育の上に考へても、日本の教育は宗教を駆逐し、宗教を侮蔑するやうな態度を執つて來たのである。併しそれも表向きに宗教を敵視すると言つては角が立つからして、知らぬ中にソロリソロリとやつて行かうといふので、教科書の上に於ては宗教に關して何等の信念を涵養する方法を採らないのみならず、師範教育の方に於て秘訣を授けて、表向き宗教に衝突かると面倒である、お前等の學問では宗教の事を論じても負ける、地方に行けば所謂

宗教家といふ小姑みたやうな者が澤山居るから、さういふ者の對手になるな、さうして何とはなしに「宗教といふものは私は知らぬけれども迷信のやうなもので、下らないものだと思ひます、」といふやうなことを兒童の頭に具合好く注込んで、次第々々に宗教を信じないやうに仕上げて行けば宜いのであるといふことが口傳、秘傳といふものになつて、段々に教育はやつて來たのである、今日はその通りに行き居る。だから宗教の事を能くは知らぬけれども、何とはなしに宗教といふものは貶さなければならぬものだと思つて、そこで何も知らぬ女教員でも「地獄極樂ナンて、そんな事は詰らぬことであります」とか、「死んだ人間が善い處に行くナンてそんな事は詰らないことであります」とか、「お彼岸にお墓參りをするなどといふことは、それよりも散歩に行つた方が宜い位でせう、」といふやうなことを言つて、柔らかな兒童の頭に何となしに宗教は詰らぬ事のやうに仕向けて、さういふ感情を養ふ事に努力して來たものである。「さうだらう」と言つて押へられれば「いやさうではありませぬ、そんな事を言うた教員もあるかも知らぬけれども、それはその人の考で、教育の方針は決してさうではありませぬ」といふやうなことを言つて巧みに尻尾を押へられぬやうに工風して、今日迄來たものである。閻魔法王の淨玻璃の鏡の前に行けば皆映つて居る事であるけれども、人間の目先を瞞着すといふことは、政治上からやれば幾らでも出來る事である。

併ながら左樣にしてやつて來た結果は今日非常な惡い影響が及んで來て、日本人はそれが爲に人格が毀れて、社會の現象も惡化して、どうにも斯うにも始末が惡い事になつて來た、言つて聽かしても改めない事になつてしまつた。人間は誰しも過ち無きこと能はずで、道り損ひはあるけれども、宗教を奉じて居れば、警告を與へた時に反省するものであるが、

宗教を失つて居る所の國民は、遣り損うた場合に幾ら言うても善い事は馬耳東風と聞き流して、惡い方へは何處迄も走つて行かうとするのである。所謂手が着けられない――收拾すべからずといふことになるのである、その恐るべき結末に達したのが今日である、どうにも斯うにも仕方がないといふことに今日はなつて居る。これでもまだ見込があると思ふのは慾目である、實際は最早見捨てるより仕方がないやうな國民の狀態であります。それは西洋の歴史に就ての考をその儘持つて來たから、丁度隣の夫婦喧嘩を見て善い事だと考へて、平和な家庭に於ても喧嘩をしなければ進歩した家とは言はれないといふので、さう喧嘩の種もないのに朝からどつき合を始めて、これで俺の處も大分進歩して來た、漸く夫婦喧嘩を仕始めたといふのと同じやうな愚を演じたものである。

もう一つの誤解は、我國の德川の中世から起つた排佛の色彩で、それは一つは儒者の側から起り、一つは神道の側から起つた。これはどちらも狹隘固陋の學見に捉はれて佛教の惡口を言つた。その主なるものは、厭世的、獨善的、この世の者の爲にならぬ、死んだ先の事ばかりやとか、迷信だとかわからず屋だとか、人民を愚にするとかいふやうなことで、世間有閑れた惡口であるが、それを一生懸命やつたのである。所が聞が惡くその當時勢力を得て居つた佛教の流弊が、淨土門や禪宗は丁度現實の向上を忘れて、普通の道德といふやうなことを輕んじた超越的の考へ、若くは厭世的の考に走せて居つたからして、丁度敵の攻擊に非常な好い口實を與へた。それは本當の佛法ではなかつたのであるけれども、向ふはそんな事は構はないのである、向ふは知らぬ振をして居る、本當の佛法を調べて見てそれが善いといふことになつたら、自分達の議論は立たなくなるのであるから、そこで善い所は觀る必要がない、お經も少

々披けて見たものもあるけれども、善いお經は初から「これはいかぬ、こんなものを見てはいけない」と言つて閉ぢてしまつて、「何か惡いやうなお經を……」と思つて一生懸命探した、その證據は歴然たるものである。一切經は實に人類文化の寶庫と言はれる位立派な經典が澤山ある、哲學上から觀ても、道德上から觀ても、宗教上から觀ても、社會教化上から觀ても、有ゆる點から觀て佛教は人類文化の王樣である。併ながらその佛教の中には澤山のお經があるものだから、やはり途中から混入した所の僞經といふものがある。後の者が面白半分に作つて佛教の中に入れた贋物がある。「如是我聞一時佛住」といふやうなことを書いて、一寸お經と同じやうな事を初に言つて、内容はその人間の冗談見たやうな事を言うたお經もあるのである。その中で最も變なお經が「觀佛三昧經」といふお經である、これは釋迦如來の日常の行動の中に就て色々愚な事を撰んだので、釋迦如來が或る時食事をして居つた、陰莖を出して寢て居つた、所がそれが五重の塔みたやうな形をして居つて、女が覗きに行つた所が段々伸びて、五重の塔が非常に高くなつたといふやうなことを書いて居る。さういふお經だけを引張つて來て、佛教といふものは斯の如きものヂヤと云うて居るのである、それが德川時代の儒者や神道家の佛教觀である。さういふことでこの偉大なる如來の聖教を侮蔑して得たうとしたやうな馬鹿者である。その尻を舐つて居るのが大部分今日の知識階級と稱する所の馬鹿者共である、そんな事であるから夜が明けんのヂヤ。

それ故に國家の興隆と佛教の興隆との密接な關係のある事をば理解する人が少ない。唯今日の弊害に驚いて、これではどうもならぬといふことから、先づ宗教に歸らんければなるまいか、さうするには佛教であらう、マア迷信でも厭世でも何でも構はぬ、佛教に歸らうか……といふやうな譯で、又歸らうと

いふ時分には何の吟味も撰擇もしない、モウヒョロヒョロになつて、「これではどうもならぬ」と言つて泣き聲を擧げてやつて來るのである、實にみつともない事夥しいものである。この大日本帝國を經綸するに就ては、左樣な愚な態度を以て偉大な佛敎を捨てる事も不都合であるが、又佛敎に歸らんとする時分に、何等の吟味もせずして泣き聲を擧げて歸らんとするやうな者は、決して共に國家の經綸を語るに足るべき者ではないといふことを前回には申上げたのである。佛敎徒の腹鑑みたやうな事を言うた譯であるが、併しこれは大なる眞理である、吾々佛敎徒に多年蓄積して居る所のこの不平不滿の精神は、卑しき感情から起つた坊主の寢言ではない。日蓮聖人の正義を學び、釋尊の明敎を學んだ結果として、どうしても新くあるべしといふ自分等の信念の中から燃え來つた所の大不平であります。

今日は左樣な攻擊の議論ではなくして、この佛敎それ自身が確に國家と調和をする所の立派な敎である、佛法の興隆する事がその儘國家の興隆を意味するものであるといふ事をお話して見たいと思ふ。それは一つには、日蓮主義者が「立正安國」と言ふことはあれは國家に阿つて居るのであるといふやうな觀察と、一つには佛敎それ自身には國家を想ふといふやうな事はなかつたのである、佛敎は少なくとも世界的の宗敎である、廣い意味に於て敎を立てたものである、又何とはなしに人生よりは高い意味を持つのであるから、厭世とか超世間とまで行かないにしても、マア〳〵國家とか社會とか人生の幸福とかいふやうな事は輕く觀て、それ以外に精神生活の奧だけを支配するものである、決して形の國家であるとか社會であるとかいふことを念とはしない、斯ういふ風に考へて居る人が少なからずあるのである。坊さんの中の大部分はさうである、又佛敎を褒める人も、さういふ所へ頭を置いて居る。日蓮主義を宣

傳する人の中にも、やはり「さう國家々々と計り言うて居つてもいかぬ、今の人間は國家などは思はなくなつて居るのだから、さう人の思はぬ所の國家などを言うて居つた所が損ヂヤ、やはり個人解脫とか個人の利害に重きを置いて、個人の煩悶を慰め、個人の幸福を保障し、少々惡い事をしても死んだら助かると言ふ方が敎を弘めるには都合が好い」といふやうな弱い音を吐いて居る者が、吾々の友人の中にも澤山出來て居るのである。

所が私はさういふ匙加減のやうな遣り方は非常に拙い事であると考へるのである。數年前デモクラシーの思想が勃興する時分にも、日蓮主義者の中に隨分意見の相違があつた、それは個人の權利利益を尊重することその事が直ちに惡いとは言はぬけれども、この國家の統率、國家の興廢といふ全體の興隆進歩といふことゝ、個人の利害關係とが衝突する場合に於てはどうしても、個人を犧牲にして國家の興隆に貢献しなければならない、詮人と雖も個人を無視するといふやうな馬鹿者はないけれども、個人の小さな慾望を悉にしやうとすれば國家の興隆を計る事の出來ない場合がある。それは平時に於ても戰時に於ても、國民が國家に對する犧牲獻身の精神といふものを持たない限りには、國運の發展を期する事は出來ない、犧牲獻身の精神と個人の利害とは一致する場合もあるが、時には相容れない事もある、一致する場合は問題とする必要はない、相容れざる時はどうしても國家全體の爲に盡さなければならないといふ、その國家本位の思想を以て進まなければならないといふことで、吾々は單なるデモクラシー獻進者とは意見を異にしたのであつた。今も尙ほその問題は殘されて居ると思ひますが、それ等これ等を解決する上には柔軟に釋迦牟尼世尊の御敎を研究して、それから流れて來た觀念、日蓮聖人の御敎を傳うてさうして吾々の決心を定めなければならぬと思ふ。

自分の小さな智慧の働きだの、或は一時の感情に依つてこの重大な佛教の教化の方針、日蓮主義の方針といふものを二三に變更するといふことは宜しくないと考へるのである。それが爲には仔細に大藏經の中に入つて、釋尊の御精神の在る所を伺つて見たいと考へるのであります。

私は色々のお經の中に於て、釋迦如來の御精神の一貫して居る事を認むる者であります。それは釋尊が「大利大果」といふことを何處でも言うて居られるのである、釋迦如來が教をお說きになり世をお救ひになる目的は、この「大利大果」を得んが爲めであるといふことを言はれる。その「大利」といふのはどういふことを意味するかといふと、無論個人の煩悶をも救ひ、罪惡をも矯めて、人格を善くする事より進むのは言ふ迄もない事であるけれども、それが及んで各個人が平和の生活になり、善良な人間に成つた結果は、因つて以て理想の家庭が出來る、その善き家庭が集つて善き社會が出來、さうして善き國家が出來る、その善き國家が協力して全世界の文明を大成しやうといふ、この全人類を眞の幸福と眞の文化に導かうとするこの目的を「大利大果」と釋迦は常に言うて居るのであります。一人を救ふ事も捨てはせぬけれども、唯個人を救ふだけではそれは「小利小果」であつて、「大利大果」と言ふことは出來ないといふのが、阿含より起つて涅槃に至る迄一貫して居る所の大精神である。後に至つて「一乘の教」といふ言葉は、一言にしてモウこの「大利大果」を意味する所の言葉である、唯一人の人を救ふならば一乘の教といふことは要らない、「大白牛」の乘物といふことは要らない、小さな羊の車でも、鹿の車でも宜いのであるが、一切を救ひ一切を理想的にしやうといふことの爲に一乘の教といふものが興つた。それは小乘の場合に於ては「大利大果」といふ言葉で常に說かれて居るのである。

それ故に增一阿含經には斯ういふことが說いてある。釋迦族の人達が釋迦如來の處に打揃うて行つて、「あなたは立派な佛に成られたが、左樣な教を以て世を導くといふやうなことに骨を折らないで、どうか迦毘羅衞の國に歸つてさうして先づ國を治領し、更に力を伸べて天下に向つて轉輪聖王と成るといふ働きをして貰きたい、轉輪聖王は世界を一統する所の王樣である、迦毘羅衞を中心にして往いては世界一統の轉輪聖王とお成りになる事を考へて貰ひたい」といふことを懇願した。その時に釋迦如來が答へて、

我は今正に是れ王の身なり、名けて法王と曰ふ。

と遣べられたのであります。この事は注意すべき點である、出家をして佛樣に成つてしまつたといふ時には、世の中を捨てたとか、國を捨てたとか、王樣どころではない、所謂世捨人といふか、普通の人から考へたならば佛樣と王樣といふものはまるつきり違ふと斯う思ふのである。それを釋迦如來は「我は今正に是れ王の身なり」といふことを宣言して居る、そこが味はなければならぬ所である。大體この阿含を餘り人が見ない、見ても素通りにしてしまへばそれつきりである、この「我は今正に是れ王の身なり」といふことでも、「ア、さうですか」と言つて通つてしまへばそれつきりであるけれども、この「我は今正に王の身なり」といふことを答へられた釋尊の大精神を十分に玩味して見たいと私は考へる。

それは何を意味して居るかといふと、自ら「法王」と名乘られたが、これが羅馬法王のやうな意味合とも違ふ、羅馬法王のやうに坊さんであつて國家を倒してしまつて、さうして自分が政權を握るといふやうなことを考へて居る王樣ではない。又日本の天皇が位を讓り給ひし時に名乘られる所の「法皇」といふ、隱居してから言ふやうな法皇とも違ふ。猥に兵馬の權を奪ふといふやうなものでもなく、隱居したやうなものでもない。それならば又宇宙の眞理を支

配するといふ宇宙法に就ての「王」といふことで、人生社會には無關係かといふとさうでもない、多くの場合には「法に於て自在を得たり」とか「我は是れ法王なり」と言はれる場合は、宇宙の大眞理、丁度基督教に於てゴッドが眞理を支配するといふが如くに、釋迦は宇宙法を支配するといふ時に「法王」と名乘る事もあるけれども、今こゝで答へられたのはさういふ宇宙法を支配するといふ意味の法王とも違ふ。

それでは一體どういふ法王であるかといふと、これは釋迦族の者が轉輪聖王に成つて戴きたいといふ言葉に對して起つた言葉である。即ち轉輪聖王といふものは二面性がある譯であると私は考へる、國王の姿をして政治を行ひ所謂德教を行ふ所の王樣――轉輪聖王は威力に依つて殘害を事とするのではない、威力を具へては居るけれども、その目的とする所は即ち正義に存し德教に存するのである。到る處を伐り從へてその利權を奪ひに行くのではない、そこに善良なる政治を行はせてその人民に幸福を來たらしむるといふことを條件とするのである。「汝の國を奪はんが爲に我は來つたのではない、汝がその國を治むるその理想が邪しまであつてはならない、その民人の幸福を保障するやうに、それには德教を布かなければならない」といふやうなことが、轉輪聖王の他國を征服する目的である。そこで左樣に姿が國王であつて威力を表にしてその裏に德教を布く所の轉輪聖王と、モウ一つは目の當り德教を表に現はして、直接に威力を用ひないけれども、威力はこれを國王の力に委せて、自分が國王を指導してさうして德教を世界に行はふとする、所謂道を表にする轉輪聖王がある譯だらうと思ふ。それ故に釋迦は「我は今正に是れ王の身なり」といふのは、國王の姿を以て威力を表にしたる轉輪聖王ではなくして、精神の內部からして世界を一統して行く所の、我が教は往いて

全世界の總ての人類の思想を支配する所の、精神的王國に於ての轉輪聖王として我は立つて居るものであるといふことを卿せられたものだと思ふ。そこには非常に强い意味があるのである。

さうしてこの威力を表にして德を行ふ所の王樣と、德を表にして威力を用ひる國王を指導して行く所の轉輪聖王との違ひといふものは、その間髮を入れぬものである。それ故に聖德太子が初めて日本に佛教を採用せられた言葉は、憲法發布の序文にありますが、どういふ意味に於て佛教を御採用になつたかと云へば、神道は我國の本教で元から在りし所の教であるから尊ばなければならない、儒教は聖賢の教、倫理を明にしたものであるから尊ばなければならない、さうして佛教はといふ時に、これは「輪王の佛典」といふ言葉を以て採用せられて居るのである。何故に日本が佛法を用ゆるかと云へば、釋迦牟尼は轉輪聖王の理想を以て、今言ふ轉輪聖王が行はんとする所の德を教へて居る者である。故に日本の國家が轉輪聖王の理想を行はうとするならば、どうしても釋迦牟尼の教に學ばなければならないといふ事が非常に强く考へられて、色々申分のある中に於て、佛教採用の言葉は「輪王の佛典」といふ言葉を以て採用せられた。輪王の教である、輪王たる者の學ばなければならぬ帝王の教である、丁度帝王の經典といふが如きもので、轉輪聖王の經典として佛教を採用せられたのである。茲に非常な深い意味が存すると考へるのであります。

釋迦如來が生れられた時の人相に於ても、有ゆる當時の印度に於ける有名な人相見がこれを觀て言ふには、「この王子は家に在れば轉輪聖王と成らん、出家せば佛菩提を成せん」といふことを申した。釋迦如來は生れた時から轉輪聖王の人相を具へてお生れになつたのである、さうして悟を開いた場合にも今言ふやうに「我は是れ王の身なり」と言ひ、法を說

く場合にも「法輪を轉ずる」と申して、轉輪聖王には輪寶といふものがあつて、それがグル〳〵と廻つて行けば如何なるものでも粉碎する所の威力がある、それと同じやうに釋迦が說く法輪の前には何者も敵する事は出來ない、その事を「轉法輪」と申して居るのである。生れた時の姿から、悟を開いた時の宣言から、敎を說く場合の態度と云ひ、最後涅槃の時に至つて阿難といふお弟子が如何なる法式に依つて茶毘し奉るべきかと尋ねた時にも、「轉輪聖王の法に依るべし」と答へられて居る、總て釋迦は最初から最終まで輪王を理想して居るのであります。それは今度この娑婆世界に出てからの事であるけれども、前の世の話をする事が度々ある、佛敎に於ては前世の因緣といふものを說く事がある、その場合に釋迦は何遍轉輪聖王に成つて居るか分らぬ。或る時我は國王と成れり、それは轉輪聖王であつたと云うて、釋迦は何遍でも、彼が王樣であつたといふ話をしたら必ず轉輪聖王である。それは色々の名前を持つた轉輪聖王として、あゝいふことをした、斯ういふことをしたといふ時には過去の話のやうであるけれども、それが釋迦が現在現想して居る事を話すのである、昔物語と言つた所が自分の頭に浮ばなければ說けるものではない。その時に俺は斯ういふことをした、あゝいふことをしたといふ、それが轉論聖王の實行すべき手本を、實例として過去に己の行ひし意味を話されて居る事は、現在尙ほその記憶の新なるものとして自らこれを行はんとするのである。

それで日本に於ては皇室に於かせられてもその意味合がズット傳つて、早くから轉輪聖王を理想せられたのであつて、元來が日本の皇室は德を以て立つて居る王樣である。「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」といふことは、即ち日本の皇祖皇宗は皆德を重んじて立たれて居るのである。建國の理想、皇祖皇宗の皇謨と稱するものは何であるか、

轉輪聖王の理想の如くに正義を世界に布かんとするものである、その正義を布かんとするに就て威力を伴うて居るのが我が皇室である。さうしてこれは非常な大事な點である、正しい事を幾ら考へても、威力がそれに伴はなければその目的は達せられない、のみならず轉輪聖王としての資格に缺けるのである、轉輪聖王は正義と威力、これを何處までも世界に行はんとするものである、我が皇室はこの正義と威力とを併せて有せられて居るものである、所謂皇室の稜威といふことは一面には正義であり、一面には威力である、如何なる者もこの稜威の前には及向ふ事が出來ないといふことを以て、皇室の尊嚴とし國民の信念として居るものである。如何に敵國が强大であらうが、如何にだまし文句を以て日本の軍備を縮少させるやうな事を計つても、愈々となつて稜威の前に立てば如何なる敵國も粉碎されるといふ、轉輪聖王の威力を維持して居るものである。

であるから學問の風が自らさうなつて來て、佛敎の中に於てもさういふ積極的の敎、例へば『仁王護國經』であるとか或は『法華經』であるとかいふやうな、現實を重んじてそこに理想の華を咲かせて行く敎より外、皇室はお採りにならない。儒敎の方に於てもやはり『論語』を重んじ『武經』を重んじ給うた、儒敎は正義は考へて居るけれども威力に於て缺けた所があるのである、勇氣は鼓舞して居るけれども「軍旅の事我れ之を知らず」と言つて、孔子は軍の事は知らぬといふ、それは少正邦といふ者を誅したといふ少し位の軍はしたけれども、これは極く小さな事であつて、大體軍は自分は知らぬと言うて居る。だから儒敎をやつた人間は所謂文弱に流れて、いつも喧嘩には負けるのである、支那に於ても霸道といふものが一方に奚つて儒敎を打毀してしまつた、秦の始皇帝が起つた時分には儒者を坑にするといつて、論語や孟子などをやつて居る學者は皆坑

の中に打込まれてしまひ、その書物は皆燒かれて何も無くなつてしまつた。その後漢の沛公が天下を一統するに至つて、終に方々の家の壁の中から論語の壁張りを取出して來て、再び天下に論語の書物が傳つたといふ位のものである。それからと雖も支那に於ては聖賢の學が本當に勢力を得ないのである、現在殊に聖賢の學は衰へて、覇道が跋扈して居るのが支那の狀態である。これではならぬといふので彼の袁世凱が晩年に至つて孔子の敎を重んじやうといふ案を立てたけれども、それが十分徹底をしない中に又袁世凱も倒れたのである。であるから今は支那の人心を繫ぐ所の聖賢の敎といふものはない、やはり覇道の文化となつて居るものであるから、所謂强い奴が勝である。

そこで威力は必要であるけれども、一方に正義を忘れてはいかぬ。所謂覇道ではいかぬ、日本に於ては山鹿素行先生がその事を明にせられて、朱子學だの徂徠學だの仁齋學だのといふやうなものは、威力を忘れて居る、だから德川の儒者と言つたらお茶坊主みたやうな者で、吹けば飛ぶやうなものであつたのを、山鹿先生が出てそれではいかぬ、どうしても聖賢の學と及び武經とを併せてやらなければならぬといふので、六韜、三畧、孫子、吳子の所謂武經七書といふものを選んで、それを併せてやらなければならぬといふことを力說するに至つた。當時の各藩に於ても長州、薩州、土佐といふやうなのは皆この武經を奉じて來た、他の藩の狼狽いたのはやはり聖人の敎のみを長禎流でやつて居つた奴が張倒されたのである。そこで日本の海軍人は、今でも聖賢の學とそれから武經七書を奉じて、一面には非常な嚴肅な正義を以て軍人精神とし、一面には威力を養つて軍人精神として居るのである。

その通りに佛敎の方もさういふ色彩を帶びて來たのである。だから佛敎でも『般若心經』だの『阿彌陀經』だのといふやうな、顏を見ない中から泣いて掛るやうなものは宮中に於てこれを講ずる事は出來ない。イキナリ死なゝい中から死んだ話をするやうなものは、この豐榮のぼる我が皇室に於ては嚴禁さるべきものである。後年必ずや我が宮中に經を講ずる事も復活せられることゝ思ふ、これは實は何時でも復活されるのであるけれども、がらくた坊主が居つて「此方が先ヂヤ」とか「彼方が先ヂヤ」とか言ひ合ひをして居るから、佛敎の復活が後れるのである。その場合には我見我執は妻らぬのである、何も法華經が善のものだの、阿彌陀經が善のものだといふことはない、この釋迦一代の經典はこれを一切衆生に與へられたのである、特に大日本帝國に與へられて居るものである、がらくた坊主の所有物ではない。がらくた坊主などはその中に厄介になつて油揚を食つて居る所の食客である。釋迦の敎の中にゴタ〳〵言ひながら飯を食はして貰つて居る所の厄介者である。この釋迦の經典は決して左樣な厭世的だとか、超世間的だとかいふやうな側を取つて我が皇國に用ふべきものではない。

だから古くから我が皇室に用ひられた『仁王護國經』の如きは、これは般若部に屬するとは言ふけれども、非常な積極的の敎で、國を護るといふことの爲に先づ行ひを護らなければならない、精神を鍛へなければならないといふことから說かれた護國の經典である。『法華經』は最初から鎭護國家の妙典としてこれを撰ばれた、法華經には明かに國家を擁護する所の思想が說かれて居るのである。それは妙法蓮華經八卷以外に、法華部の經典が澤山ある、『大薩遮經』とか『大法鼓經』とかいふお經、それが積極的の敎である事は明瞭である。この現實の世の中を向上せしむるが爲に努力する所の國家とか、政治とか、道德とか、戰爭とか、刑罰とかいふやうな問題に就て意見が明かになつて居る。他の『阿彌陀經』など

といふものは、國家と言つても善いも惡いも何も分りはしない、お婆さんが座敷牢の中で殺されるといふだけの話で、死んで行つたらどうするかといふ簡單な問題だけである。それは首を吊りに行き居る者とか、或は死刑の宣告を受けた囚人とかいふ者に取つては今でも尙ほ多少の用に立つかも知らぬけれども、日本人が皆死刑の宣告を受けて居る譯ではないのである。さういふお經の緣て起る所の緣由來歷といふものを考へなければならぬ。それは法華經の中にその事を示されて居る、「如來の滅後に於て佛の所說の經の因緣及び次第を知つて、義に隨て實の如く說く」とある、その經の因緣といふものを知らなければならぬ。何故にあんなお經が起つたかといふ因緣次第を考へないに依つて、下らない事が起るのである。法華經は今申す大薩遮經なり大法鼓經なりに於て、非常な積極的に國家の經營が論じてある。それで日本人の用ゆるのは、儒敎では山鹿流の武敎を嚮れては役に立たぬ。佛敎では日蓮主義的の大薩遮經のやうなお經でなければ、他の國家の經綸を忘れたやうなものは、我國には向かぬと相場の決つて居るのである。それが佛敎に對する常識である。儒敎に對しては武敎を降いての生溫い腰の拔けた、覇道の爲に負けるやうな儒敎は駄目デヤ、佛敎は唯ボク〳〵といふやうな厭世悲觀のやうなものは日本では頭から駄目だと斯う決つて居るのが、これが佛敎に對する常識である、今さら事新しく言ふ程の問題ではない。

そこでさういふ事から考へて見ると、釋迦如來が「我は今正に是れ王の身なり」と言はれた意味を日本は能く諒解して居るのである。皇室に於かせられても、聖德太子に於ても、長い間の日本佛敎の正統といふものは、佛敎をさういふ意味に於て奉戴して來たものである。それ故に皇室から人民に對して「篤く三寶を敬へ」といふ事を仰せ出された譯である。

所が德川時代に至つて、佛敎は個人解脫の敎だとか、或は厭世的のものだとかいふことを言ひ出したのは、それは佛敎の流弊淨土門や禪宗のやうなものに對して起つた事である。それは淨土門や禪宗は佛敎の中から出たものには違ひないけれども、流れて弊を生じたるものであつて、決して佛敎を代表すべき思想ではないのである。最も厭な間違ひを起したのである、釋迦如來は厭世といふやうなことは一番嫌ひである、釋迦は第一回の說敎からして、非常に現實に執着したる「凡夫行」を攻擊し、唯肉と酒といふやうなことで暮して行くのも間違つて居るし、又これと反對にこの世は詰らぬからと言つて首を吊りに行くやうなのもいかぬといふ、この二つ即ち「凡夫行」と「婆羅門行」とを正面の敵として粉碎して、その眞中の道を開いて行つたものである。現在に處するには現在を重んじ、その中に平和の生活と善根功德を積んで、人生を意義あらしめて、その奧に永遠の光を望んで行くといふのが佛敎である。その位の事を考へなければ大體話にならぬぢやないか、釋迦樣とも言はれる者が、唯世の中は首を吊つて行くやうな事を考へたとか、そんなやうな事では三千年東洋の文化に貢獻することは出來やしない。印度にだつて澤山の偉い人が居つたのである、中々偉い哲學者、宗敎家の居る中に於て縱橫無盡にこれを切開いて、どんな偉い者が來てもお釋迦樣の前には一溜りもなく敗北をしたといふ位な、この明晰なる智慧を持つて居つた人である、大薩遮經となつて殘つて居るこの「大薩遮」といふのも、最初は非常な偉い婆羅門であつたけれども、釋迦の前に行けばグーの音も出ない、實に偉い人である。それがそんな阿彌陀經や般若心經のボク〳〵ぐらゐの事で終を告げたなどゝ思ふのは、思ふ奴が實に餘程念入の馬鹿である。

そこで次に考ふべき事は、釋尊の直接國家に就て

の御説諭である。これは到る所の經典に説かれて居るが、今も原始的に殆ばれて居る所の小乘阿含の『中阿含經』三十五の卷、『長阿含經』二の卷に出て居る所の「七不衰の法」といふものを御紹介して見たい。これは『佛般泥洹經』といふ大乘の涅槃經にも詳しく出て居る、國家不衰の七法と申して釋迦は常にこれを説かれる。國の衰へないやうにして行くには七つの大事なことを護らなければならないといふのである。それで釋迦が國王から招待でもせられたならば、國家の衰頽を防ぎ、國家の興隆を計る所の數を常に説數せられたものである、お婆さんの死んで行くやうな事ばかり話したものではない、若しそんな事ばかり話をするのであつたら國王は厭がつて、「あんな陰氣な奴はモウ來るな」といふことになるけれども、國王の招待の盛んな事は、此方からも來て呉れ、彼方からも來て呉れと言つて中々釋迦如來はその招待に應ずる事が出來ぬ位人氣を持つて居つたのである。故に釋迦如來が國王の請に應じてお出になるといふことになれば、實に有喜雀躍してお迎ひしたものである、それは一場の講演と雖も實に肯綮に當る所の、意義あるお話が聽かれるからこれを歓迎したのである。何も物好きに釋迦を迎へて喜んだものではない。

この七不衰といふことは色々の言葉で言ひ現はすのでありますけれども、先づ分りの好い言葉にしてこれを申すならば、第一は「正事を講論」するといふことである、これはどういふことかと云へば、國民が寄つてその國の政事を能く相談を仕合ふ、今の所謂輿論政治のやうなものであるが、國民が皆相集つて大事な事柄は能く意思の疏通を圖つて、國家の盛衰興亡に關する事柄を違り損ひをせぬやうにしなければならないといふ風に、民心の一致結合を計り、大事に當つては胸襟を開いて擧國一致といふことに行かなければならぬといふことを第一條件として説くのである。今日のやうに政黨を造つて喧嘩を仕合つて、揚足を取り合ふといふやうなことではない、今日の輿論政治といふものは、揚足取りのやうに考へて居るのは、これは西洋から來た輿論政治であつて、本當の輿論政治ではない。輿論とは何を言ふかと云へば、國内に於ける一致結合といふことを尊ぶものヂヤと私は考へるのである、詰らない問題を互に喧嘩をさすやうに煽動して仕向けて行くといふやうなことは、寧ろ輿論破壞運動である。西洋はどういふ風に考へて來たか知らぬけれども、拙い事だらけであるから、政治でも結り違うて居るのだらうと私は思ふ。釋迦が理想したる所の「正事講論」といふことは、即ち國民の一致結合を理想して居るのであります。

第二は「長幼和順」といふことである、これは所謂社會の先進の者も後進の者も仲良くしなければいかぬ。「あいつは古い」の、「あいつは飛上りだ」のと言つて長幼の間に喧嘩をしてはいかぬ。前の「正事講論」は横に國民の一致を説くのであるし、この「長幼和順」は縱に年齢は違うてもやはり年の往かない者は親を尊び老人を尊び、老人も亦若い者がこれは見込があるといふ風に考へて行かなければいかぬ。若い者は親父を馬鹿にして「あんな者は迚ても話にならぬ」と云ふ、親父の方では若い者を貶して「あんな飛上りの戀愛觀みたやうな事ばかり言うて居る奴は駄目だ、叩き出してやらうか」といふやうになつては、その國は持たぬといふことがこれが大切な事である。各々の家庭に於て長幼和順しないやうな國家は、決して國家としても榮へるものではない。それから又これは唯長幼といふ年齢ばかりではない、官民の協力も、所謂上下一致といふことも皆この言葉の中に含まれて居るのである。上に立つ者も下に居る者も、會社で言つたなら社長も勞務者も皆協力しなければいかぬ、今日勞働運動に於て唱へられ

るやうな團體の結合といふことから、團體的利己心を認めるといふことは佛教に於ては無い事である。勞働團體は勞働者の利害だけを考へて、社會國家はそつち除けにして資本家と喧嘩をする、資本家は又表面穏かな顔をして居るけれども、色々な衝策を弄して自分の利慾を恣にするといふやうな、さういふ階級闘爭といふやうなことはいけないといふのが、この「長幼和順」といふことである。

第三は「遵法禮度」といふことであります、この「遵法禮度」といふことはその國に傳つたる所の善良なる風俗習慣から來た法度といふものがある、その國の慣行の中から善いものが殘つて行くのである。正月は朝早く暗い内から起きて、顔を洗つて先づ若水を汲んで佛樣に供へるとか、神樣に供へる、さうして門松を立てゝお雜煮を祝ふといふやうなこともその一つである。お雜煮など拵へたら錢が要る、門松などを立てたら錢が要ると言つて算盤ばかり考へて居る人があるけれども、そんなに算盤ばかりで世の中は行くものではない、門松を廢したら幾らの利益があると能く人が言ふけれども、それならいつそ日本人が皆死んでしまつたならば、毎年日本の米が皆剩りはせぬか。さういふ單に算盤だけで世の中が行くと思つたらいかぬ、算盤ナンといふものはズーッと末のものである、どうしてもその國の慣行といふものを大切に守らなければならぬ、所謂年中行事となつて居るやうな事は、詰らぬ事のやうでも、やはりお月見には團子を拵へて供へるといふやうなことは、その事に害の無い以上はそれが人心に非常な良き影響を持つのである。正月には年始廻りに行くといふやうなことも、さう遠い處迄は行けぬにしても、懇意な人の所に年始に行くといふことはやはり善い事である、それを葉書に活版で刷つて、隣の家迄それで濟ましてしまつて、自分は家に寢て居るといふやうなことはやはりいかぬ。さう廣い範圍に

やる必要はないが、世話になつて居る人の所には正月七日の間に行くといふやうなことは、廢すべからざる事と私は考へるのである。さういふことを釋迦如來は重きに置かれて、その國の歴史的に發達した善良なる風俗習慣から來る禮儀作法を重んずる國は榮へる、それを何も彼も虚禮だとか何だとか言つて、實利的にのみ考へて算盤ばかり彈くやうな國は到底うまくいかぬと言はれるのである。

第四には「孝養敬順」といふことである、孝養は親に對し、敬順は師匠に對し長者に對する事である、親には孝行をしなければならぬ。目上の人には敬ひ從うて行かなければならぬ。お師匠樣は無論の事、世間でも世話になつた人もある、やはり社會には階級といふものがある、階級と云うても今日言ふやうな意味でなく、自然に生ずる所の自分の目上といふものがある、目上の人に對しては尊敬を拂つて行くといふことが大事である。今のやうに平等々々と云うて人格は平等ヂャと云ふ、それは原理を言ふのである、原理は平等であるけれども、その中に於ても非常な發達をする者と、發達しない者とが出來て來るのである。さうして世話になる者はどうしても頭を下げて行くのが當り前である、それをどこ迄も唯平等といふこと一つだけ考へて居るといふのは實に愚な事である。小學校に這入つて學問する子供は皆平等に同じ教科書に依つて學問して居るのであるけれども、それが卒業して社會に出て働く時分にはそこに非常な差別を生じて來る、それはその人の人格の相違である。人格は平等といふ譯には行かない、御月樣と鼈の相違があるのである、嘘をついて巡査に叱られ、泥棒して牢へ這入り、出て來れば又泥棒するといふやうな奴と、天下國家を憂へて一身を犧牲にして奮闘して居る人間とは、その人格は月と鼈の相違があるのである。人間といふものはいつの時代でも人格は平等ではない、本來平等であるべ

き者が平等に行かない、それを唯平等ヂャと驚かされて好い氣になつて、「人間は平等ヂャ、階級も特權もあるものか」ナンと言つて騒いで居る。何を言うて居るのか分らぬ。平等であるべき人格が平等に行かなかつたといふことを慚謝して、舌を喰切つて死なゝければならぬやうな奴が、却て「平等ヂャ〳〵」と言つて大きな面をして居る、さういふ譯のものではない。人間一人の力倆といふものは、月給の高などに現はれて居る所を見れば、一人が月に千圓とか二千圓ぐらゐの所が上等であつて、一番詰らぬ者でも七圓か八圓ぐらゐであるから、その相違は幾らも違はない、先づ多く取つても五十人分か百人分しか取れないけれども、その人間の存在の價値といふものは、百人や千人の違ひではない、その一人が何百萬人、何千萬人にも替へられない意義の有る立派な人と、それからその人はコツ〳〵働くから一圓五十錢貰つて居るけれども、實は早く死んだ方が宜いといふやうな者もあるのである。その人格の相違の偉大なる事を考へて置かなければならぬ、それは豚や何かならば潰して目方で賣ればさう違はぬけれども、人間の價値、人格の値打といふものは殆ど計る事の出來ない非常な相違のあるものヂャといふことを知つて、偉い人には敬意を拂ふといふことが文明の常法である。偉い者を馬鹿にして掛るといふやうなことは世の中が毀れて行く時の悲劇である。

それから第五には「宗廟崇拜」といふこと、これは先祖を大切にする事である。日本の國家で云へば皇祖皇宗を崇め、又自分の家に於ける先祖を大事にして行くといふやうな、この祖先を崇拜することが人心を善くする所以である、これが諸々の德を生み、善を積ましめて、所謂民德篤きに歸するといふことになるのである。先祖を大切にするといふことは唯宗教だと思ふと間違ふ、その觀念が非常に民心を德行に導くものであるから、そこで宗廟崇拜といふこ

とを敬へられた。

第六には「閨門純潔」と云うて、男女の關係が紊れてはいけないから、その點に嚴肅に注意しなければならないといふのである。

第七　「沙門崇敬」といふこと、沙門と云へば坊さんのやうであるけれども、これは坊主に限るのではない、沙門と云ふのは所謂先覺者である。善い事をして惡い事をしないで、人の師表たるべき者を大切にしなければいけない、やはり國民はさういふ善い人を手本にして、それに敬意を拂つて行くやうにしなければいかぬ。有ゆる階級に必ず先覺者といふ者がある、坊さんには坊さんの先覺者があり、軍人には軍人の先覺者があり、商人にも模範的の先覺者があり、勞働者にも模範的なる勞働者があるのであるから、それを尊敬して行く、それが沙門である。沙門と言つても頭を剃つて居る者ばかりではない、それは佛法の中の沙門である。廣く云へば大工の沙門もあれば、車挽きの沙門もある譯である、その沙門を尊敬して行かなければならぬ。それを「ナニッ、貴樣も俺も同じ者ヂャ」といふことになると、世の中はどうしても惡い奴の方が多くて人格者が少ないから、數でこなす事になれば忽ち「貴樣ッ」と言つて惡い奴が跋扈して、善い人が小さくなつて居らなければならぬ、斯ういふことになればその國は立つものではない。多くの坊さんが善い坊さんを掴へて「こいつ面倒臭い事ばかり言ふ、叩き込んでしまへ」といふことになればお仕舞である。昔薪ざつぼう騒ぎと言つて千葉縣あたりで、少し出來さうな坊さんがあると、薪ざつぼうを持つて來て闇夜に乘じて袋叩きにして谷の中に放り込んでしまふ、「あんな奴が出て來てつべこべしやべりやがつて面倒臭い、やつつけてしまへ」といふやうな事をやつたものである。さういふ事をすれば決して敬は盛にならない、有ゆる方面に於て沙門即ち先覺者を尊敬しなければ

いかぬといふことを說かれた。

以上七つの事が所謂「國家不衰の七法」として釋迦が常に說かれた事でありますが、これ等を總括して、何の爲に斯くせねばならぬかと云へば、その國家の衰亡を防いで興隆を計るが爲には斯くあらねばならぬと說敎せられたのである。所がこの七法を說かれた事が非常な効能があつたのである、吾々の今お話するのはほんの受賣であるし、その意味もお話の中の一部分しか御紹介しないのであるが、釋尊はモウこれが十八番であるから、非常に說明が巧いのである、自由自在に到る所釋迦如來はこれを話される。故に釋尊の說法敎化に行かれた國は、色々政治上に於ても道德上に於ても宗敎上に於ても風俗習慣に於ても良くなるからして、隨て民心が良くなり、社會事情が良くなり、その國運が隆盛に進んで行くのである。即ち國家の興隆は國民精神の如何に在るといふことを釋迦は何處へ行つても說敎したものである、これが厭世的だとか、悲觀的だとか、超世間的だとかいふことは言へない、皆國家の爲に說法をして歩いたものであるのである。

この事は只今申す通り『佛般泥洹經』にも出て居るし、『中阿含經』の三十五の卷、『長阿含經』の二の卷に詳しく出て居る、又その他にも到る所にこの「七法」といふことは說かれて居る。モウ有觸れて居る事で、何時でも釋迦如來は「國家不衰の七法」とこれを簡單に仰しやつても分る程になつて居たのである。

さうして釋迦如來は尙ほ斯ういふことを併せてお說きになるのである。我が敎を弘むる者は「邊地の人と作る莫れ、顚倒の行を爲す莫れ」といふことを言はれるのである、「邊地」といふのは即ち片田舍を言ふので、文明の開けない處を言ふのである、「邊地の人」とは田舍者、「邊土の人間」といふので、物の筋も何も分らない者を言ふ。佛敎を宣傳して行くには、その國家を文明に導かなければならない、邊地の人で何も知らない、唯「お有難い〳〵」と言つて、うどんの食逃げをして本山へ錢を納めますといふやうなことで事が足りるものではない。我が敎を弘める者は邊地の人となつてはならぬ、やはりチヤンと文化を進めて行き、これを啓發して行く所の宣傳をしなければならぬ。「斷種の行」とは如何に文明ぢやと云うても善い事をしないで我利々々亡者みたやうになつて、今日の文化生活などゝ言つてハイカラな變な家を建てゝ、さうして何も善い事をしない、さういふことではいかぬ。文化を開いて血して善根を積む所の人になれよといふことを標榜して居るものである。これも到る所にこの話をするので、要するに今日世間で考へて居るよりもつと佛敎といふものは氣の利いたものぢやといふことを國民が諒解しなければいかぬ。譯の分らぬ變なものゝやうに思はせて來た罪を、どうしても十分に問はなければならない。

そこで國家的の德敎を說かれる事は非常に多いのであります、人民に對しては國を愛する所の心と、王樣を慕ふ所の心とを奬勵された、所謂忠君愛國の觀念を奬勵されるのである。國王に對しては優しい慈愍の心を以て、民を想ふ事子の如くあれよといふ事を說かれる。この事は一再ならず說かれるのであつて、人民は王を慕ふこと父を想ふが如くあれよ、國王は民を想ふこと子を想ふが如くあれよといふことを以て、國王を敎へ、人民を敎へて、溫かなる道德的の國家の進歩を計られた、それが一切經の原則である。

法華部の『大薩遮經』の如きに於ては、その事のみを說いた所がある、それは『王論品』と稱して、王道を直接に論じたので詳しく色々の問題が擧つて居る。これは國家を經綸するに就ての根本の觀念から進んで、戰爭のこと、刑罰のこと、道德のこと、宗敎のこと、文化現象に就て總て國家經綸の眼より

してこれを論じたのである。それは嚴燥王といふ王様が色々問を發して居るのに對して、大薩遮といふ人が答をした、その問答往復が實に立派な議論であつてそれがその儘法華經の思想である。これは今諄々しく講釋しないでも、その經文に就て讀んで見たならば、成程佛敎といふものは國家に對して斯くまで篤い觀念を持つて居るかといふことが分るのである。(拙著『大藏經要義』卷一所載)嚴燥といふ王様に對して直接國家經綸の事を敎へて居るのである。

それから『守護國界主經』といふお經がある、(『大藏經要義』卷二所載)これが又國界主を護るといふに就ての事を說かれた。この「國界主」とは國王の事である、「守護」するとはそれに忠節を捧げて王様を守立てゝ國を安らかにして行く事である、その事だけを問題にして十卷も說いてある、非常な立派なものである。さうして色々菩薩行を說かれた中に、國王に對して忠節を盡し、國王の爲に計つて國家の隆盛を期するといふことが、有ゆる菩薩行の中に於て一番大事なものであるといふ結論を明にしたのである。菩薩行といふのは、救世軍が往來に鍋を吊して、この鍋の中に錢を入れて呉れゝばそれが餅になりますといふことも菩薩行である、或は勞働者の爲に無料宿泊所を拵へたり、或は簡易食堂を開いたり、これ皆菩薩行であるけれども、さういふことは國家興隆の中に發達するのである。幾ら安い飯を食はしてやらうと言つても、國家がやられてしまつたならば、無料宿泊所も簡易食堂も皆バタ〳〵と倒れてしまふ、救世軍が下げて居る鍋も空ツポになつてしまふ、鍋ごと溝に放り込まれてしまふ。どうしても國家の興隆を本にして、その中にさういふ區々たる社會事業などは發達して行くものヂャといふことを明にしたのである。普通の宗敎家のやうに、國家が先やら社會事業が大事やら分らないで、往來に鍋をぶら下げて置いたらそれが宗敎家の事業ヂャといふやうな、さういふ頓馬な事を釋迦如來は敎へて居られないといふことが分るのである。今でも基督敎ばかりではない、佛敎の坊さんでもそれが分らない、分らないから坊さんといふ者は、そんな國家ナンといふ大きな事を言ふのではない、「隣の婆が死んだ、幾らか葬式料を近所で錢を集めてやつたら宜からう」といふやうなことだけが坊主の仕事だと思つて居る。さういふことも惡い事はない、それは菩薩行の洵に少さな技業の問題である。さうして鰥寡孤獨を潤すといふやうなことは、社會の進運に伴うて國家が自ら行ふべき事で、これは宗敎事業ではない、國家事業、社會事業であつて、市が經營し國家が經營して行くべきであつて、坊主が僅かな錢を貰つて歩いたり、巾着の底をはたいたりしてやるべきものではない。又社會事業の名に於て、却てその中へ這入つて自分が飯を食ふといふやうなことで行くものではない。これは宗敎の事業といふようは所謂社會事業、國家事業である、都會の人間の爲に安い食堂を拵へよといふことは、坊主の手に依つて拵へなくとも、市役所なり內務省の社會局なり、さういふものが世話をするといふのが當然である。それを少しばかり餘計食堂の世話をしたから、その宗敎が善いとか惡いとか云うて居るけれども、そんな事は宗敎が衰へて而して後に僅に社會事業の枝葉を以て宗敎の存在を圖つて居る所の瞞着運動といふものである。惡い事ではないけれども自分の本領がお留守になつて居る、宗敎の本領といふものは、左様な精神を起すべく政治家にも市民にも敎へさへすれば、それで宗敎の運動は足りるのである。

さうして一番大事なのは國家擁護の觀念を鼓吹しなければいけない。菩薩行の三十二種の大悲心の中に、國王を守護する忠義が、一切の慈善事業や社會事業や菩薩行を包括することを說いたのが守護國界主經である。その中には面白い譬喩も出て居る、即

ち池の譬があつて、池の中に住んで居る鯉や鮒や鮨が可愛いと思つたなら、先づ誰でも餌をやりに行くだらう、併ながら餌をやうに行く人間は本當に鯉や鮒を愛して居るものではない、やらぬよりはましだらうけれども、餌などをやつた所が、その池の堤防が毀れて段々水が流れてしまふとか、或は旱天で水が無くなるといふことになれば鮒は餌を街へた儘腹を引繰返してしまふのである。即ち國家は堤防の如く、國王は池に住んで居る龍のやうなものである、龍は印度の傳說に於て、龍の住んで居るやうな池は大雨が降つても堤防は毀れない、旱天が續いても水が無くなつてしまはない、即ち龍の威力を以ての故にその池はいつも適度の水を維持して、その中の魚が幸福を受けるといふことがあるのである。そこで堤防を國家に譬へ、龍を國王に譬へて、この龍が大事であり堤防が大事である、中の魚を世話をして行くと言つて一匹々々の鮒を呼んで餌をやる位な事は小さな菩薩行であるぞといふことを示されたのである。この位國家本位の思想を明瞭に說いたものは、儒敎にもなければ何處にもない、世界中に釋迦牟尼の敎ぐらゐ國家觀念を明瞭適切に敎へたものはないのである。それを學ばぬから佛敎といふものは厭世的だの超世間だのといふことを言ひ出す、實に申譯のない事である。この『守護經』(守護世界主經簡單に守護經と云ふ)をどうしても日本人は歡迎をしなければならぬのである。先年私は歸一協會に於てこの話をした時に、或る西洋人がそれは「非常に立派なお話であるが、さういふ結構なお經があつたら佛敎各宗は爭うてこれを用ふるでありませう」と言つた、私は實に答辨に困つた、「誰も爭つて用ひませぬ」「どうなつて居りますか?」「何れの宗旨も皆これを忘れてしまつて、一人も守護經を取出して社會に紹介しやうとする者はありませぬ」「それでも左樣な善いお經ならば誰かそれを愛する者がありませう」「それは書物の虫が非常にこれを愛してこの本を蝕つて居るやうであります」と言つたら笑つて居つた。斯ういふ立派なお經があるのを日本人が歡迎しないといふのはどういふ譯であるか。さうして德川時代の儒者や神官が觀佛三昧經などを擧げて、佛敎の惡口を言うたのを尤もらしく聽いて、その尻を舐つて居るといふことは、實に羞しい事であります。東洋の文化を學ぶべき、又これを維持し發揮すべき責任を帶びて居る日本人として、餘りに無責任なる態度と言はなければならぬ。斯ういふことを勝手に言はして置くべきものではない、又さういふ學問をすべき人間は澤山世の中に居るに拘らず、何の爲に本を見て居るのか譯が分らぬ、詰らぬものを文學だとか何だとか言つてやつて居る、そんなものは何方でも宜い ヂャ ないか。斯ういふ東洋の文化に大關係のあるものを明瞭に社會に紹介して行くべきである、坊さんの手などを俟つべきものではない、德川時代の儒者が佛敎の惡口などを言うたのは實に羞しい、無學の至りでございます、と言つて慚謝すべき責任は日本の學界全体にある事である。

それから尙ほ進んで考へて見ますると、この國家に關する事は『大涅槃經』の中にも詳しく出て居るのである。殊に佛敎の卓越して居るのは「病行」といふものを敎へて居る事である。涅槃經には五つの修行がある中に、最後に病行といふものを說いて居る、「病行」といふのは、その事自体は宜くないことでも、對手に依つてはやらなければならぬ。所謂毒を制するに毒を以てする事がある、醫者が病の爲にはモルヒネ或はカンフルといふやうな毒藥になるやうなものでも、これを適度に應用する時には最も効力の多いものである。本當の良い藥は實は毒であるかも知れない。社會の濁濁なるものを改善するには、唯生溫い「善い事は善いのだ」といふやうなことではいかぬ、膿を抉るやうな事を以て、即ち藥は

眼が暈るやうな奴を持つて行かなければ大病を蓬す事は出來ない。今日のやうな社會を救濟する場合にはやはりさういふ激烈な教を要する、激烈な教といふのは何かといふと、どうしても不正な觀念から武力を動かして來る者、假に歐米人の人種の偏見に捉はれ、世界の人類の平等福利を忘れて、歐米人のみが特權を得て有ゆる民族を虐げむとする事が彼等に深く考へられて居るならば、さういふ謬見を粉碎しなければいかぬ。それが爲には唯お經を讀んだり坐禪をくんだりして居る事だけではいかぬ、彼が威力を用ひ武力を以て、この全人類の三分二を占めて居る有色人種を虐遇、虐待せむとする場合があるならば、やはり武力を以てこれを粉碎すべきものであるといふのが、涅槃經に說かれて居る所の所謂「病行」といふのである。

私はこの事を今日の佛教徒が忘れぬやうにしなければならぬと思ふ、「刀兵の劫には大力勢を有して、その殘害を瞋じて遺餘なからしむ」、といふことを涅槃經には說かれて居る。世界が表面平和を裝うても、その裏面には武力を以て不正を行はんとする者があるならば、やはりそれを打碎くだけの力を國民をして養はしめなければならない。今日本はどういふ地位に居るか、自分には能く分らぬけれども、單なる平和を夢見て居るべき時ではないと思ふ。支那のあの內亂の有樣を觀ても、色々尻押しがあるといふやうな噂も傳つて居る、日本では分らぬけれども、露西亞では亞米利加のヒューズが尻押をして居るといふので、ヒューズの人形を拵へてそれを叩き殺すやうな事をしてお祭をやつたといふことであるが、露西亞人は中々面白い事をやると思ふ。日本は何も知らずに、そんな事は大きな聲で言うてはいかぬと言つて居るけれども、さういふ風に萎縮して居つて果してこの日本の國家が成立つかどうかは分らぬ。國が大切だといふのは一面には教を興へ、教を以て導くのであるけれども、一面には國の力に依つて教が保護されるのである、東洋に興りし所の、亞細亞に榮へた所の佛教は、亞細亞民族が叩き込れた時にはこの教も共に倒れなければならない、運命を共にするものである。亞細亞がやられてしまつて亞細亞の精神文化が殘るといふことは決して言へない、さういふ場合も少しはあるけれども、大體に於て假に日本の國家が亡されたとしたならば、消極的に考へても日本人の幸福は奪はれてしまひ、自由は束縛されてしまひ、非常な重い負擔を着せられて、子孫の末に至る迄言ふべからざる苦痛を感じなければならぬと思ふ。さうして三千年來傳はる所の歷史上の事績は皆毀されてしまふ、國家が衰亡する場合に於ては、歷史の美しい話は跡方もなく消へるものである、楠公が忠臣であつたといふことも意義を爲さない、日蓮聖人が立正安國を唱へた事も意義を爲さない。今迄誇としたる歷史上の美談は悉く根抵を失つて、何を話すべき種もなくなる、心細いとも何とも言へない厭な氣分にならなければならぬ。さうしてそこにあつた所の精神文化は侮辱されてしまふであらう、惟神の教も、聖人の教も、佛の教も併せて粉碎されるものと觀なければならぬ。殊に彼等は宗教に就て固陋なる觀念を持つて居る、故に佛像の如きは偶像であると言つてこれを溝に放り込むであらう、先祖の位牌も石塔も偶像の片割であると言つて叩き毀すといふやうなことを先づやられるものと觀なければならぬ。日本の國家が衰亡するといふ場合に於ては東洋の文化は粉碎されるものである。

それは消極的に考へた場合を言ふのであるが、積極的に國家の責任を思うた時に於ては、日本は何の爲に存在をして居るか、即ち轉輪聖王の理想を持つて立つて居るのであつて、正義と幸福とを全人類に與へんとして、三千年の長き歷史を經て日本は茲に存在して居る。それが今衰亡を來たすやうになつ

たならばこの建國の理想も國家の使命も皆水泡に歸してしまつて、實に嘆かはしいとも何とも言ひ樣がない事になると思ふ。

現代人がその謬見を改めるといふことも、或は能率を發揮するといふことも、消費を節約するといふことも、皆この根本の國家觀念と結んで來なければならぬと思ふ。宗教を撰ぶにも國家意識から撰び、道德を撰ぶにも國家意識から撰び、殖產興業も國家意識からやつて行かなければいかぬ、唯自分の小さな 愎 勘定から考へて、さうして能率の問題或は節約の問題を如何に論じて見た所が、十分の効果はなからうと思ふ。宗教を論ずるもやはりその通りであつて、本山がどうとか信徒がどうとかいふ問題ではなくして、茲に國家の興廢存亡といふことを考へて、如何なる意味に國民を教化指導するのが國の爲になるかといふことに立戻らなければならぬ。小さな一つの宗派は盛衰興亡があつても恐るゝに足りない、併し大日本帝國が萬一衰亡に歸する事があつたならば萬事止みなんといふことになるのであるから、日蓮聖人が「先づ國家を祈つて須く佛法を立つべし」と結論したる所の立正安國の精神は實に正しいものである。佛の精神を受繼ぎ、日本の建國の理想を受繼いで、國家の現狀に適合したる所の教として今尙ほ偉大なる光を持つものであると信ずるのである。この日蓮聖人の立正安國の御趣意を非難するやうな頭は、その內に在ると外に在ると問はず、私はそれが一番國家に殃を爲すものであると申したいのであります。

尙ほお釋迦樣がこの社會現象に關して或は人類文化に關して色々の教訓をせられて居る事がありますが、その點を併せて御照介して佛の教は活々とした現實の教であるといふことを明にしたいと思ひますが、それは更に講題を改めて、佛教の社會國家に直接關係のある所以を申上げる事にしたいと思ひます。

日蓮主義より見たる無量義經（第二十三回）

井村日咸

善男子。第四是經不可思議功德力者若有衆生得聞是經若一轉若一偈乃至一句得勇健想雖未自度而能度他。與諸菩薩以爲眷屬諸佛如來常向是人而演說法。

第四に王子不思議力の文で、前の船師不思議力と同樣の意味で說かれてある、自ら度せざれども、而も他を度することを得ることを述べられた、それに就いて前の功德力は堅牢なる船即ち所持の教法が尊き故に他を度し得ることを擧げられたが、今の不思議力は其持經の者も諸佛菩薩が守護せらるゝことを說かれたのである、此文の中に譬喩を擧げて王子が誕生すれば國王及び夫人は之を鍾愛し臣下は之を崇敬するが如くと說かれた、此經を信じて、此教法の中に教はるれば、佛子の自覺を生じて本佛の御子として地位を得る處より、自分は幼稚なるが故に何等の活動は出來ないが、其父母の地位が勝れて居るが故に共々に守護して過誤無からしめんとせらるゝ、即ち此經を信ずるものは諸佛菩薩に護念せらるゝことを說かれたのが第四の功德力である。

譬如國王夫人新生王子。若一日若二日（中略）若至七歲雖復不能領理國事已爲臣民之所宗敬諸大王子以爲伴侶王及夫人愛心偏重常與共語。所以者何以稚少故。

稚少なるが故に何等國事を領理する實力は無いが、王子として將來國事に係る力がある故に、臣民には敬はれ同族を伴侶とし國王夫人の愛撫の中に育てらるゝのである、我等初心の信仰者を今佛が如何に愛護せらるゝかを說いた譬に難有い御文であります。

善男子。是持經者亦復如是。諸佛國王是經夫人和合共生。是菩薩子（中略）雖復不能體眞理極。雖復不能震動三千大千國土雷奮梵音轉大法輪已爲一切四衆八部之所宗仰諸大菩薩以爲眷屬深入諸佛秘密之法所可演說無違無失常爲諸佛之所護念慈愛偏覆以新學故（下略）。

合譬の文である、國王と云ふは本佛釋迦牟尼世尊である、夫人と云ふは佛の說き給ふ敎法である、佛は敎法を說いて衆生を敎化し給ふ、其敎法の中には諸法の實相即ち眞理を說いたが、此實相の妙理を證つて佛と成ると云ふ處から、實相の妙理を佛母の實相と云ふて居る、そこで此實相を夫人に譬へたのである、佛と敎との力に依つて此敎を信ずる王子が出來る、一切衆生が佛子としての自覺を呼起すのである、此關係を佛の國王と敎の夫人と和合して菩薩の子を生ずと云ふたのである、其菩薩の子は未だ新學であつて眞理を體ることも出來ねば、其を說いて衆生を化導する活動をも爲し得ない意氣地無しであるが、本佛の御子としての自覺あることに於て、一切の四衆八部に宗敬れ、諸大菩薩は自ら眷屬として新佛子を戴き、佛は慈愛を垂れらるゝことに爲るのである、夫れは父たる本佛の證悟が勝れ地位が尊高であるが故に、新學の佛子が守護せられ尊敬を拂はるゝのであつて、自身の力では無いと云ふことを深く意識して置かねばならぬ、そうでないと增上慢の過を生ずることに成る、吾々新學のもの縱令自分の力は無くとも諸佛の護念あり諸大菩薩の守護あるが故に、自分の力弱きことに怯ぢないで、勇猛精進して本佛の護念に酬ゆる樣心掛ねばならぬ。

善男子。第五是經不思議功德力者若善男子善女人若佛在世若滅度後其有受持讀誦書寫如是甚深無上大乘無量義經是人雖復具縛煩惱未能遠離諸凡夫事而能示現大菩薩道（中略）譬如龍子始生七日即能興雲亦能降雨（下略）

第五の龍子不思議力の文である、此經を信じて受持讀誦等するものは未だ煩惱は一つも斷じない、從つて凡夫の事即ち凡夫生活より一歩も脫することは出來ない、凡夫の生活より脫しないが、而も大菩薩の道を示現するで、爲る仕事は立派な仕事が出來る、此點は第三船師不思議力にもあつた如く、此經を信ずるものゝ心掛として大事な點である、大乘の敎を信ずるものは縱令煩惱を斷せずとも、其煩惱を善用して淸淨なる仕事に向つて働かせて行かねばならぬ、煩惱を惡用し本能の儘に振舞ふて行くのは眞實の凡夫で迷ふて居る人々の爲す事である、佛子の自覺を生じて、此敎の爲に働くものは其煩惱が淸き方面は顯はれて行かねばならぬ、自己一身の安逸を貪らんとするよりは、一切衆生の苦惱を除くべく其欲望が顯はれねばならぬ、國家社會の福祉を增進すべく努力することが自己の仕事であると云ふ決心で進まねばならぬ、其處に欲求あり名譽を得んと志ざす處が煩惱を善用すると云ふのである、國家社會をだしに使ふて己人の利益を貪らんとするが如きは煩惱を惡用して益々邪道に踏入るものである、法華經に「治生產業實相と違背せず」と說き、日蓮聖人が「宮仕を法華經と思召せ」と抑せられたのは此點である、今此經に此意味を說いて居るのである、龍子は生れて七日にして能く雲を興し雨を降すが如く、我等凡夫は煩惱を斷せず凡夫の生活の中に、此敎を信じ行ずることに於て大菩薩行を行じて濟世利生の大功德

事を成辨し得ることを擧げられて、此を第五の功德力と爲られたのである。

善男子。第六是經不可思議功德力者、（中略）受持讀誦是經典者雖具煩惱而爲衆生說法令得遠離煩惱生死斷一切苦、衆生聞已修行得法得果得道與佛如來等無差別。譬如王子雖復稚小若王巡遊及以疾病委是王子領輝國事（中略）如大王治等無有異（下略）。

第六に治等不思議力である、此經典を信ずる初心の行者が數を說くも、佛樣がお說に爲る數も、其力は同じであると云ふことを說かれてあるのである、煩惱を斷せざる凡夫の說數も佛の說數も數其ものには違目は無いのであるから、其數を受けたものが如法に修行するならば其効果に異あるべき筈のものでは無い、譬へば國王が病氣に罹られた場合太子が代つて政治を執らるゝ樣なもので、丁度現今の我國の政治の樣で、陛下が御病氣で御座せば皇太子殿下が攝政の位に就き政務を代理せらるゝ、陛下の政治と攝政の政治と何等の異目は無い樣なものである、此は我等初心の凡夫の行者を奬勵せらるゝ意味でお說き遊されたので、縱令意氣地は無くとも、佛と同樣な行動が出來ると云ふ自信力を與へて此敎法の爲に努力すべき樣お說きに相成つたのであると拜察するのである。

已上第二より第六に至るまでの功德は共に凡夫地に於ての功德を擧げられてあるに依つて、曩に此を名字觀行の兩即を當てゝ見たのでありますが、何れに致しましても我等が如き初心の末斷惑の凡夫が此經を信ずることに於て斯樣な大功德を成辨し得ると云ふことは誠に難有い事で、全く此經の力が偉大であるに依つて我等の樣な意氣地無いものでも此大功德が得らるゝのである、此を思へば一生懸命此經の宣傳弘布に努力せねばならぬ事であります。

くしを可愛がられた懲かしい眼です、たとひ書像でもわたくしには大丈夫なるに忍びません、財産はもう殘しく有ませんから、射る事を許して下さい』と頭を垂れてシタ〳〵泣き出した。裁判官は之を聞き『君は誠に孝行だ、君こそ眞の父の子である』と判決一下、全財産は悉く〳〵弟の所有となつた、が併し弟はそれを兄に讓つて受取らず、兄も亦其心に感じて辭退した、判官は止むなく之を二分して兄弟に十分の調査を加へた、兄弟は更生の人の如く、爾來極めて仲よしになつて、少しも爭ひたしなくなつたとのこと。

兄弟の財産爭ひも結果より見て、前項とは正反對のこれは又、何とした奮持のよい談話であらう。雖雨一滴氣爽爽、判決いた判官も不感に溜飲がさがつたらうが、吾く我々も耳根すがゝしく、何となく光明い思ひがするではないか。アー同胞は勿論比隣近所親類縁者一切合財みな仲よく睦まじく暮したいものだ、チーいやな世の中の裁判沙汰。

一七、草鞋祭

市島德次郎と云へば菊濱殿下の大資産家であるが、其家で最も珍らしい事は毎年一回執行される草鞋祭である、一体市島家の先祖と云ふのは見る影もなき水呑百姓で有た、僅かに他人の田地を小作して露命をつなぐと云ふの外、草鞋を作るのが毎日の生業で有た。初代德次郎は此草鞋を船に滿載して佐渡に渡り、相川金山の役所へ行て納した、役人共は喜んで其特志を感謝した。斯處で德次郎は役人に賴つて鑛夫共の穿き古しの草鞋の下渡を願出ると、異議なく聞屆けになつたものだ。德次郎は歩み立て其處等中の草鞋殘らず拾ひ集め、船に滿載して越後に歸つたが、それは何の爲であらう。

彼は大釜に湯をたぎらせ、それで古草鞋を投げ込んで、さて長い間之を煮詰め、煮殼は取捨てゝ仕舞つた、釜の中に沈澱したものは柄杓で掬して喜んだ、キラ〳〵と光り輝く金粉が釜に着いて釜の底に沈んで居る、貫つて見ると四十貫匁もあつた。德次郎は此處に意外の利益を得て、市島家復興の氣運が開けた、爾來この事を繰返して莫等大成功を齎らして、今は菊濱殿下のみでなく、全國中に指を屈する大地主となつたのである。

豪農市島家の復興美談、其むかしを忘れぬ記念の草鞋祭開くからに感銘の沙汰ではある。由來運命の神は進んで取るの勇氣と、刻苦勵精の腕の力の中に來臨影響ましますもので、衰轉んで榴牡丹の夢みる懶情者流には到底もうやないが、お出で下さらないものと斷念めたがよい。金剛附着の古草鞋を拾下げるとは着眼が奇警ナ抔と、第二義以下の卑語だてをするのは愚者の云ふ事也。

記事

千葉縣巡教日誌

松本堅晴

△二月廿五日午前十時半大網縣に着せる予は木村布教師、土屋管事、山田誠心氏等の出迎を受け山邊に至り午後二時より同小學校にて聽衆百二十名「開會の辭」手代木常整「佛と人」木村布教師「國力振興と日蓮主義」松本監督布教師。△廿六日午後一時より大網町小學校に於て聽衆百五十名「佛と人」木村布教師、「國力振興と日蓮主義」松本監督布教師△廿七日蓮照寺にて信員研究會集る者廿一名「五綱に對する考察」松本監督布教師△廿八日午後一時より麻俣小學校に於て聽衆二百名「開會の辭」堂亮雄「信仰生活」木村布教師「國力振興の第一義」松本監督布教師△三月一日午前九時福俣を發し、徒歩一里上谷飯島寺に至る。同寺は數年前落雷の爲堂理燒失せしも現住松本眞釋氏の盡力により新築せり。午後一時より立正結社法要續いて講演聽衆二百名、「開會の辭」松本眞釋「立正結社支部長挨拶」土屋眞容「林間れば影鮮なり」木村布教師、「立正安國」松本堅晴△三月二日午前十時上谷發腕車九十九里濱岸片貝本覺寺に至る。午後一時より立正結社法要「開會の辭」土屋眞容「根深ければ枝繁し」海老澤布教師「蒲濱岸に打てり」松本監督布教師、當日聽衆八十名△三月三日午前十時腕車片貝を發し宮蓮成寺に至り小憩午後一時より小學校に於て聽衆百餘名、「開會の辭」伊藤寛隆「根深ければ枝繁し」海老澤布教師「民風作興の基調」松本監督布教師△三月四日午前九時腕車東金町本漸寺に至り午前十時より信員研究會參會信員二十二名「五綱に對する考察」松本監督布教師△五日午後一時より同町西福寺に於て聽衆百五十名「開會の辭」山岡日紹「正しき信仰と其力」金坂布教師「民風作興と日蓮主義」松本監督布教師△六日午前東金驛發松尾驛下車腕車木刀妙受寺に至る。午後一時より開會聽衆六十名、檀家二十五戸を有するに比し盛會と謂ふべし「草鞋履れば後語からす」海老澤布教師「民風作興の基調」松本監督布教師△七日公平村小學校に至る午後一時より開會「開會の辭」飯田村長「正しき信仰と其力」金坂布教師「民風作興の基準」松本監督布教師△八日午前十時發成東町に至り東光會主催成廣館に於て午後一時より開會す。聽衆百五十「開會の辭」海老澤布教師「正しき信仰と其力」金坂布教師「東光會の趣旨」武田文學士「民風作興と日蓮主義」松本監督布教師、東光會は小島法明氏中心となり野田寄四郎氏の熱烈なる外護と相俟て漸次發展しつゝあり△九日早朝東金驛を發し日向の驛にて下車、一行の出迎を受け上布田桑王寺に至る。午前十一時開會聽衆五十名「人格の完成」草切布教師「民風作興と日蓮主義」松本監督布教師△十一日午前佐倉町妙經寺に於て信員研究會出席信員七名同夜午後七時より同寺にて開會「菩薩行」渡邊布教師「民風作興の基準」松本監督布教師聽衆六十名△十二日千葉市本覺寺にて信員研究會出席信員九名△十三日千葉より自働車にて行く事二里更に山道徒歩一里上泉寶泉寺に至る。午後一時より更科村小學校に於て聽衆百六十名「開會の辭」橋本村長「人生と修養」草切布教師「民風作興の基調」松本監督布教師

△十四日午後七時より千葉市本覺寺に於て「開會の辭」草切信榮「菩薩行」渡邊布教師「民風作興と日蓮主義」松本監督布教師聽衆五十名なるも相當なる知識階級多數を占む△十五日午前十時半より千葉縣小學校に於て「菩薩行」渡邊布教師「一歩不覺」草切布教師「民風作興の基準」松本監督布教師聽衆六十名○以上千葉縣下の一巡を終り直ちに歸路に就けり。

各地教報

廣島教信 △二月十二日妙詠寺に於て妙詠婦人會例會「婦道」能仁一師△同二十二日能仁一十師長男二女の年回供養の爲め日蓮主義大講演會開催す。當日午前十時能仁信正中川日史師の列席にていと莊嚴なる法會を營み、午後二時、七時の晝夜二回に亘りて講演、聽衆滿堂、殊に一年志願兵の隨喜參集する者が多かつた。△二十三日午後二時七時本願寺に於て能仁中川兩師の講演、聽衆滿堂、△同二十三日午後○時半廣島經文盲啞學校に中川日史師、廣島電氣會社車掌運轉手に能仁等一師の精神講話△二十四日午後一時より縣下高田郡并原村在鄉軍人會主催の本願寺同村小學校講堂に於て中川日史師の精神作興講話、同夜七時高源寺に於て日蓮主義講演。

吳だより 吳教壇は篤信者眞鍋鶴吉氏祖母五十年忌追善の爲め淨財を供養せられたので同山能仁信正の巡錫を煩して大獅子吼を公開するの光榮を得た。二月二十四日午前吳警察署の精神講話。次で朝日遊郭從業者の爲めに廓內演舞場に於て講演。午後四時嘉鍋氏宅法養。午後七時五番町講堂に於て公開講演「現代世相に順て」富元布教師「健全なる國民精神の發揮」能仁信正聽衆滿堂盛會であつた。

大阪堂島寺教報 二月二十二日立正結社談話會「法華信仰の本質」和井田寛舟氏の講演並に社員諸氏の感想談ありて夜の更るを知らざりき△二十五日讃仰會「開目抄講題」井口富雄氏「立正安國論大要」石井得雄氏「信仰の德と力」京藤布教師。多數の聽者に多大の感動を與へ法悅歡喜に滿され散會す。

備前和氣 三月六日和氣校講堂にて日蓮主義講演會開催。「我等の覺悟」大川眞一氏「我國民性試驗の時」吉永日淨師。「社會生活の宗教的淨化」中川監督布教師△同八日菊に創設したるたちばな十供會の發會式を挙行す。熊井上人導師の下に讀經、君が代及唱歌（立ち立ち渡る）を合唱。次で趣意書朗讀、熊井會長の式辭、島越署外數名の祝辭、橋本執事の答辭、後會歌を唱し正午閉會す。參集の兒童約三百、盛會なりき。

金澤布教 △二月十三日夜、立正會講演「佛聽衆綠起」木鄉宮次郎氏。聽衆八十餘名△十五日夜、一談會主催涅槃會紀念講演「釋尊中心の佛教」木鄉氏、聽衆百三十餘名△十七日夜、於坂井氏宅「釋尊の涅槃と日蓮聖人の降誕」木鄉氏△廿二日本長寺講演「天晴地明」藤田純榮師「法華經講義」木鄉宮次郎氏△廿六日於本長寺天晴會講演「法師品概要」（二）藤田師「大藏經講義」木鄉氏△廿八日本行寺講演「現世安穩後生善處」木鄉氏。

千葉縣前ノ内 二月四日午後常覺寺に於て十二日講「善は急げ」中嶋元道師△六日午後常覺寺に於て青年團例會。「天理長法」山老鶴治君「對來感」君塚太一君「情理の融合」中嶋元道師△十日夜常覺寺に於て婦人會「乙丑の歳」中嶋元道師△十三日夜大和村田中法光寺に於て「開會之辭」高田日暢山主、「信の力」中嶋元道師。

岡山縣津山の日蓮主義敬老會

長幼序を爲し古老を尊重するの道德が近來漸く忘り弱もすると老人を疎んずる傾向のある今日、老者を敬ひ、その健康を祝福し、重れてよく長壽を保ち我邦發展に貢したるの功を賞揚する爲にこんど岡山縣津山町の日蓮主義者として知られてゐる林伊平氏の發起で全町敬老會が生れ四月上旬にその創立發會式を擧げる筈であると

勝海舟先生遺蹟保存淸明文庫事業資金勸募

設立趣意

江戸城受渡は王政復古の大業を完成せる要件なり、若し其の受渡にして圓滿に行はれず、官軍兩軍兵火を交ゆるに至らば、江戸八百八街は忽ち焦土と化し、五十餘年前に於て、一昨秋九月の大震火災以上の慘害を見るべく、延いて內亂を惹起し國內の人心動搖せば、佛國は幕府に左袒し英國は薩長を援助し、外國干涉の端緒を開き、皇國の隙誓に關する重大なる危機に瀕するに到りしやも亦知るへからず、今にして之を思ふも愛慄然たらざるを得ざるなり。

此の重大なる時機に際し、江戸城攻擊開始豫定の前日たる慶應四年三月十四日、勝海舟西鄕南洲兩雄の意氣相投じ肝膽相照したる會見に依り官軍兩軍の接戰を未發に止め、平和の間に其の受渡を了したるは、江戸住民の幸福たりしは固より言を俟たず、我が帝國興隆の第一步に一大度編を與へられたるものなり。

今や我が國民は、內は帝都復興の緊急なる狀態を顧み、外は國際關係の重大なる結果に鑑み、大に奮起を要する秋に方り、五十餘年前に於ける江戸城受渡の當時を回想せば、誰か薩西鄕兩雄の私心を去りて國家を憂慮せる至誠に對し大に感激せざる者あらん。

且夫れ最近數年來、世道人心は頹廢し國民思想は動搖し、國民の精神作興を要すること今より急なるは無きの時機に際し、薩西鄕兩雄の如き公明正大一點の私心なく、功名富貴を超越して國家の爲を以て自ら任ぜる、大偉人の精神と人格とを國民の直面に展開して活躍せしむるは、國民教化の爲に一大權威たるを得へし。

是秋に方り伯爵靜精君は、先代海舟先生遺愛の別宅たる洗足軒、及其の移轉地に充當すへく、海舟先生の墓井に西鄕南洲先生を記りたる創魂祠の所在に隣接する土地を、國民精神作興に活用する目的を以て本會に寄贈せられたり。

本會は其の寄贈を受け、一面之を永久に保存するの途を講じ、一面其の活用を一層有効ならしめんが爲に、教化機關を設置すへく、洗足軒を中樞とする淸明文庫を設立し、政治・法制・倫理・哲學・教宗・國史・其他國民精神涵養に資する圖書を蒐集して、公衆の閱覽に供し、且附屬講堂を設け、倫理・哲學・佛教・儒教・神道及國史の講座を開設して、篤學者又は求道者に研究と教養との機會を與ふる施設を爲し、以て教化の源泉を究むる道場たらしめんと欲す。

以上の趣旨を實現すへく計畫せる事業費の豫算は、左に記載するが如し、幸に大方の贊助に依りて之を完成するを得は、獨り本會の光榮たるに止らす、國民精神の作興に資し、國家興隆の一助たらしむるを得へし、本會は今や內外多事の重要なる時局に際し、道を求め國を愛する志士仁人の本事業に贊同せられ、深厚なる援助を給はらんことを冀ふ。

事業費豫算

一金五萬圓也設立資金

內譯

金參千圓　洗足軒修繕
金壹萬貳千圓　書庫
金貳萬圓　講堂及附屬室
金貳千圓　外圍及庭園
金八千圓　家具什器及書籍
金五千圓　事務費及宣傳費
一金五萬圓也維持基金
計金拾萬圓也

寄附規定

一、淸明文庫事業資金は篤志者の寄附金を以て之に充つ

一、寄附金の申込は淸明會事務所に於て之を受く

一、寄附金は淸明會振替口座（東京四四七六六番）又は左記銀行に於ける淸明會當座口に拂込を請ふ

株式會社第一銀行永店
株式會社十五銀行本店

一、寄附者の芳名及金額は國民新聞紙上に之を掲載す

資金寄附者芳名（第一回）

金五千圓　公爵　德川家達殿
金三千圓　公爵　德川慶光殿
金二千圓　侯爵　德川圓順殿
金一千圓　伯爵　德川達孝殿
金八百圓　伯爵　德川達道殿
金二千圓　伯爵　松平直亮殿
金二千五百圓　子爵　澁澤榮一殿
金一千圓　大橋新太郎殿
金二百圓　野田卯太郎殿
金一百圓　勝　勉殿
金一百圓　高橋晴安殿
金一百圓　松本健次郎殿
金一百圓　山本留次殿
金五十圓　粕谷義三殿
金五十圓　下村鹿次郎殿

合計金一萬八千圓也

東京市京橋區山下町十二番地
財團法人 淸明會
電話銀座（一九〇八五番）（一〇三五番）

朝鮮釜山顯本教會々堂建築淨財勸募之辭

人心思想の如何によりて強大なる國家の基礎も一朝にして倒壞し廣況なる世界の平和も之が爲に混亂せられ光輝ある文明の建設得て望むべからず。斯の如き事實歴々として吾人の面前に展開し來たる。大聖釋尊は曰く「毒蛇猛虎よりも恐るべきは惡智識なり」聖者日蓮は曰く「國土亂れん時は鬼神亂るる鬼神亂るが故に萬民亂る」と然るに今や事世滔々として惰眠の弊に陷り精神の力を失ひ物慾の追求に疲れて暗黑の野に彷徨し一點の清光を認め得ざるもの多きを致ぜり。今にして風教の作興する事無くば浮華輕佻の風一世に滔浸し民心益々動搖國力漸く空虛を來し復た如何ともすべからず。殊に朝鮮は我日本と併合以來爰に拾有餘年、着々教育と産業の開發に顧秀なる成果を見るも、未だ宗教の方面に於ては其の緒を見ず、之が爲に下層鮮民の多くは赤化の思想に傾倒されて遂に不逞の輩を見るに至る苟くも心を邦家の前途に繫くる者豈論心戮力以て之が救援に努めざるべからず。其の救援の術は日蓮主義の思想を以てせずば斷じて不可能也。不肖橫山惠正遇る大正四年拾月海外宣傳を志し單身一の大義を獅子吼せられしを回想する時生等の血は自ら湧出でて聖戰の陣頭に參加するの光榮を喜び翌大正五年二月十一日日蓮聲傳天晴地明會を設立し大正十一年五月顯本教會を設置して日蓮主義の宣傳に盡力を致す。其間あらゆる困苦多々なるも漸くその教化の實現れ爰に昨年夏釜山中心の位置に會堂建築敷地を購入し更に會堂建立の計畫も已に成り二月十一日（紀元節）を卜し地鎮式を擧げ直に工事に着手せんとす。希くは隨喜の士女この聖業に贊助し淨財を喜捨し以て發願を成就せられん事を。

大正拾四年一月

發起人　橫山惠正　永見京造　熊本新　江川傳太郎
野中主稅　別府禮吉　矢頭伊吉

寄附金勸募要項

一、會堂五拾六坪五合　金壹萬二千參百圓（煉瓦二階立）
一、建築……合計壹萬六千貳百七拾圓也　土地……九千參百圓也　總計土地建築共貳萬五千五百七拾圓也
一、屋鋪貳拾八坪七合五勺　金參千九百七拾圓（同二階立）
一、寄附金は朝鮮釜山大龍町諸本布教所へ申込及納入願上候

魔法インキ瓶出現

改良許特ポケットインキ

ころんでもさかさになつてもインクがこぼれません
詰替は自由に出來ます
今や大中小女學校各會社工場寄宿舍等にて白熱的好評を賜る
今回實物宣傳の爲愛讀者に限り校名又は會社官衛團體等の捺印申込者に限り原價で提供致します
カタログ無代進呈　見本品參錢切手拾枚送つて下さい小包便にて壹個送ります……

總發賣元　舟橋商會
名古屋市中區白山町四五
振替名古屋二四二三番
電話東局四四二七番

社寺建築設計監督及臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依賴に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

臺灣檜材ノ六大特徵
一、耐久防腐
二、蟻害絕無
三、香氣清楚
四、木質堅靱
五、木理整然
六、木色高雅

東京市麴町區有樂町三丁目三番地
社寺工務所（電話銀座三〇八八番）
神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所
福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所（電話二二三〇番）
大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所（電話西三二二八番）

目次

宗教の五綱に就て……本多日生
弱き者への愛……三上孝基
法華經要文講義……本多日生
記事報導……

第廿九年五月號

本多日生猊下施本用著書一覧

○法華經自我偈講義　拾部　特價　金貳拾錢
○法華經要文（改訂再版發行）　並製　金壹圓（送料共）　上製　金參拾五錢
○教育勅語と思想問題　拾部　特價　金五拾錢　金貳拾錢
○うゐの奥山今日こえて　拾部　特價　金壹圓（送料共）　金貳拾錢（送料共）
佐藤海軍中將著
○此の際に於る吾人の覺悟　拾貳部　特價　金壹圓廿錢（送料共）　金拾貳錢
以上各送料一部金貳錢　金壹圓（送料共）

名古屋市東區田代町城山
統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

統一定價		
一部	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料		
表紙一頁	金貳拾四圓	前金
一頁	金拾五圓	之事
半頁	金九圓	
四分一頁	金四圓	
五圓		

大正十四年三月十七日印刷納本
大正十四年四月一日發行（第三百六十一號）
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
名古屋市東區千種町字五反田五二番地
印刷所　三登社
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
名古屋市東區田代町字城山七十七番地
振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯局
電話東五四八七番
振替名古屋一〇八一九番

不許複製

顯本法華宗教義專門講習會開催廣告

一講題ト講師　本尊論　管長大僧正本多日生師
　　法華信仰ノ基調　宗務總監僧正井村日成師
一會期　大正十四年五月二日ヨリ仝六日マデ五日間
　　毎夜間午後七時ヨリ仝十時マデ
一會場　大阪市東區西高津中寺町地藏坂北蓮成寺
一會員　聽講券金壹圓會期中有効
一申込　大正十四年四月二十五日限リ
　　大阪市東區西高津中寺町蓮成寺内
申込所　顯本法華宗
主催　立正結社大阪支部